

2024.4  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やま 富 薬

4号

第46巻  
No.417



クヌギ *Quercus acutissima* Carruth.

(ブナ科 *Fagaceae*)

**生薬** ボクソク（樸楸） 樹皮を夏に剥ぎとり、水洗いして陽乾する。

**成分** フラボノイド：quercetin、クマリン誘導体：fraxin, scopolin、タンニン、でんぷん、糖類、脂肪等。

**効能** 駆瘀血、止瀉、解毒作用があり、腫瘍、痔、下血、打ち身、下痢などに用いる。漢方処方では十味敗毒湯、治打撲一方などに配合される。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



樸楸は第十六改正日本薬局方(2011)から収載された生薬で、クヌギ、コナラ (*Q.serrata*)、ミズナラ (*Q.mongolica* var. *crispula*) 又はアベマキ (*Q.variabilis*) の4種の樹皮とされています。それぞれ国内の低山地や平地の照葉樹林に混成して生えることからカシノナガキクイムシのナラ枯れ被害の時には樹林内に点々と枯れた樹木が目立つたことがありました。生育数が多いことから生薬では珍しく100%国内産で賄っています。

クヌギは日本を含むアジア北東部に分布し、本州(岩手県、山形県以南)、四国、九州、沖縄、朝鮮、中国東北部、台湾、ラオス、ミャンマー、ブータン、ネパールなどに広く分布する落葉広葉樹で、樹高は15mにもなる高木です。幹は直立し、樹皮は暗い灰褐色から黒褐色、厚いコルク状で縦に深く不規則な割れ目が生じます。葉は互生し、有柄、長楕円状の披針形で、葉の左右は不整形、葉縁には2mmほどの針状の鋸歯が並びます。葉身は薄いですが硬く、濃緑色で表面にはつやがあり、秋に枯れても枝からなかなか落ちず、冬も枝についていることがあります。花期は春から晩春にかけて、雌雄別の風媒花を咲かせます。雄花は黄褐色の10cmほどの雄花序が穂状になって垂れ下がり、小さな花をつけます。雌花は、上部の葉の付根に非常に小さい赤っぽい花をつけます。果実は翌年の秋に成熟し堅果で、他のブナ科の樹木の実とともにドングリ(団栗)とよばれ、ほぼ球形で、基部半分は碗型の殻斗に包まれています。殻斗の回りには線状の鱗片が密につき、細く尖って反り返って棘状になります。アベマキはクヌギと非常によく似ています。本州(山形県以西)、四国、九州、朝鮮、中国東北部、チベットなどに分布する落葉高木で、葉の裏面は小星状毛を密生し、灰白色を呈します。果実は翌年熟します。ミズナラは樺太南部、北海道、南千島、本州、四国、九州、朝鮮、中国東北部などに広く分布する落葉高木です。葉はほとんど無柄、倒卵状長楕円形で縁はやや大きな鋸歯があります。果実は1年目に熟し、殻斗は半球形です。コナラも同じく北海道、本州、四国、九州、朝鮮に自生する落葉高木で、葉は互生し有柄、葉身は倒卵状長楕円形、果実は年内に実り、ミズナラより小さく、殻斗は浅い杯形です。

古くは『日本書紀』(720)に記載があります。景行天皇十八年(4世紀頃)の条に「筑紫後国の三毛(福岡県三池)に到りて……天皇、問ひて曰はく、是何の樹ぞとのたまふ。一の老夫有りて曰さく、是の樹は歴木といふ」と「歴」の文字を使っています。『養老令』(718)には「衣服令の服色条」に「橡墨」とあり、家人、奴婢といった最下級の者の服色とされたことが記されています。

薬としての利用は『新修本草』(659)に果実は「下痢。腸、胃を厚くし、人を嚮ぐ禦ぐ」、斗殻は「散にし、及び煮汁を服すれば、下痢を止めると、木皮、根皮について『本草拾遺』(739)に「悪瘡、風に因り、露を犯したために腫れたものには、煎汁で日に洗い、膿血を洗い尽せば止む。また痢を治す」と外用したことが書かれています。日本では江戸中期の漢方医香川修庵(1683-1755)がコナラ属植物の皮「樸楸」を配合した打撲による腫れや痛みに対する処方「治打撲一方」を考案しました。生薬、処方共に日本で生まれた漢方薬です。江戸中期から後期に活躍した漢方医花岡青洲(1760-1835)は『万病回春』(1587)の「荊防敗毒散」を組み替えて「桜筍(ヤマザクラ *Prunus jamasakura* の幹のあま肌を削ったもの)」を加えた処方「十味敗毒劑」を考案しました。これに浅田宗伯(1815-1894)が桜筍を桜皮または樸楸に代え、これを「十味敗毒湯」と称し、化膿性皮膚疾患・急性皮膚疾患の初期、じんましん、湿疹・皮膚炎、水虫などに用いました。(村上守一 記)